

平成 21 年 11 月 16 日

インド・アジア開発

崖っぷちのパキスタン

テロ攻撃連発の過激派と軍の戦い、政治分裂、経済不振

破局瀕するパキスタンは立直るか

パキスタン軍が過激派制圧に失敗すれば、影響はパキスタン内だけに留まらない

Zardari の孤立化進行し軍との関係も深刻化、国政分裂だが軍は権力再掌握回避か

広く知られているが、米国が主役を演じ、ミリタントを区別して追及するパキスタン軍の作戦に同意

血塗られた 10 月

10 月 5 日	イスラマバッド、WFP への自爆テロ	死者 5 名
9 日	ペシャワール、Khyber バザール、爆弾	死者 5 4
11 日	ペシャワール Fidayeen 攻撃 GHQ	1 9
12 日	Shangla 軍用車への自爆テロ	4 1
15 日	ラホールで 3 Fidayeen 攻撃	2 7
	FIA HQ, Manawan 警察学校, 上級警察 HQ	
	Kohat 警察署	1 1
	ペシャワール 無人自動車爆弾	1
16 日	ペシャワール 自爆自動車 CIA センター	1 5
20 日	イスラマバッド 国際回教大学 自爆テロ 2 件	7
22 日	イスラマバッド 准将車	2
23 日	Kamra 航空通信施設 自爆テロ	9
25 日	イスラマ・ラホール自動車道 自動車爆弾	2
	ペシャワール 自動車爆弾	
27 日	イスラマバッド 准将車襲撃	
28 日	ペシャワール 自動操縦自動車爆弾	1 1 7
11 月 1 日	Bara 遠隔操作爆弾	7
11 月 2 日	ラウルピンディ 自爆テロ GHQ 付近	3 5
	ラホール 自爆テロ 警察署	1
	(小計 3 5 3)	

10 月 28 日爆弾満載の遠隔操作自動車がペシャワールの人混みした Meena バザールに突入爆発し、散乱した人間の手足、黒焦げになった胴体、血まみれになって泣き叫ぶ多数の女の子達。生活に困窮しているパキスタン一般市民にとって忘れ難い記憶になったことだろう。救急車に運ばれる多数の負傷者、ショックで悲嘆に暮れる人々、建物を焼く尽くす猛

火、混乱した地獄の絵図は、長期亘る対過激派戦争の様相が大きく変わったことを市民に知らしめた。パキスタンの一流新聞 Dawn のコラムニスト Cyril Almeida は「雨あられと全ての物が降り注ぎ、頭を抱えよ、顔を覆え、体を丸めよ（胎児姿勢）！」だったと書いている。

当日、115以上の命が失われ—その多くが女子と子供—、10月初め来のテロによる死者が350人を超える結果になった。パキスタンの苦難期に対する米国支援を強調するべくヒラリー・クリントン米 국무長官が丁度3日間のイスラマバッド訪問した時に市民攻撃テロが発生した。米国と同盟ゆえ、この苦難は今後も発生するだろうと多くの人がまだ予想している。

テロ攻撃は大胆になったのみならず、血生臭くなり且つ地域拡大化している。「Pakistan Taliban」とAl-Qaeda分子は、治安関係者と治安機関をターゲットにしているようだとい前は信じられていたが、今や市民に対しても頓着しないようである。Dawn紙論説でも「国家は前例の無い暴力沙汰に直面し、よろめいている」と表している。

タリバンと目される過激派の脅威拡大に関し、パキスタン軍は、南Waziristanの部族地域で断固とした戦いに乗り出し来ている。作戦のコード名はRah-i-Nijaat (Path of Deliverance 救出への道)で、パキスタンでのテロの中枢拠点地への進撃である。南ワジリスタンだけで3万の軍が展開し重砲、戦車、ヘリコプターとF-16戦闘機、の支援を受けている。軍によると、多くのテロと各地での過激派の根っ子は半自治区のMehsud部族地域である。又、米軍の無人飛行機に依る攻撃で8月5日に殺害されたが、長年に亘りパキスタンの重要犯人として手配されていた人物、Baitullah Mehsud配下のTehrik-e-Taliban Pakistan(TTP)と連合したUzbekを中心とした外人ミリタント1000-1500人を含む1万余の頑強なミリタントと当該地域で戦闘している。当該地は所謂「Punjabi Taliban」を含むパキスタン全国からのミリタント及びAl-Qaeda関連外国人ミリタントの隠れ家であり、訓練地である。とのことである。

更に、事態は深刻ではなさそうだが、パキスタンの政治は民主主義の歴史の浅さに危惧の念を齎す状況に在る。国家の中枢部、特に軍とAsif Ali Zardari大統領の間、では相互不信と断絶が拡大している。論争されてるNational Reconciliation Ordinance(NRO 国家和解法*)が国会で批准されない公算大の見方が強まって、Pakistan Peoples Party(PPP パキスタン人民党)共同代表の命運は尽きると言う噂がもち切りである。

この法が制定されないと、大統領と現在政府の権力部門に居座っている一族に対する汚職嫌疑が再燃するだろう。Zardariが実力者になるのか、降板するのか、噂は喧しい。

* 訳者註

Benazir Bhutto 女史が (英米の後押しで) 亡命から帰国して首相に就任(女史の夫

Zardari は汚職容疑で収監されていた)。Zardari を無罪にすべく、NRO を前大統領 Musharraf 将軍が議会に提出。他方、国外追放に処したムスリム連盟の Nawaz Sharif (元首相) もサウジから帰国。この 3 人が組んで (?) ムシャラフを大統領の座から引き摺り下ろしたが、Sharif は Zardari にしてやられた状況。

Benazir が暗殺され、15 歳の息子と Zardari がパキスタン人民党 (Pakistan Peoples Party - PPP) 共同代表になった。

他方、パキスタン経済は世界的不況、電力不足と高いインフレに打撃を蒙っており、治安と政治情勢の不安は吊いの鐘を鳴らしている。パキスタン国内の市場とレストランは一皮肉なことに嘗てテロが盛んだった Karachi を除いて一寂れ、国民は偏執的になっている。テロ攻撃の流れと人任せのパキスタン治安状況が、デリーを含む世界の主要都市をパキスタンは斯様な残忍なテロを抑制する能力が無いのではないかと言う不安に陥れている。大問題：パキスタンは救われるか？ 核武装しているパキスタンがアフガニスタンのようになり、危険な分裂をしてタリバン主義国家になってしまうのではないか、と言う懸念を世界が感じている。

斯様な次第で、パキスタン軍の部族地域での生死を賭けた戦いが生残りへ重要なのであり、パキスタン社会は、多くの人がテロ頻発を予想したのだが、国土からミリタントを根絶を実行してこなかった。Waziristan 南部で軍が空陸から作戦遂行しているので、選挙では僅か 13%が軍進出に反対するに留まった。

米国は、Al-Qaeda が 2002 年来 Waziristan 南北で根拠地を構築してきたと考え、2004 年来 CIA は無人飛行機でミリタント・リーダーを標的にしてきている。この攻撃はこの 2 年間強化され、パキスタン社会から抗議の声も出ている。然し、当該地区の残忍な過激主義者とのパキスタン軍の交渉は一在来の部族指導者を一掃しようとする一過去惨めに失敗してきた。

2004 年、2006 年、2008 年、パキスタン軍の最初の 3 回の当該地への侵攻は屈辱的な撤兵に終わった。2008 年は別として、2004 年と 2006 年には作戦開始前から軍は損失を蒙り、平穩を唱え部族戦士との交渉を打切らざるを得なかった。

当局は、「今回は基礎的なこと(spadework)をやってきた」と今回は事情が違おうと表明しており、軍指揮官の 1 人は「この作戦準備を三ヶ月に亘り準備してきたし、国家的な世論を後ろ盾にしている。これは大きな違いである。世論はテロリストが絶望的な攻撃に出るだろうが、今回の懲罰が中止されると全てが無駄になると理解している」とのべている。

The Spadework は他部族の戦士達一以前 TTP と同盟だった Qaziristan 北部の Hafiz Gul Bahadur と Waziristan 南部の Maulvi Nazir of Waziri tribe一との中立化交渉も含んでい

た。軍は以前の作戦失敗で、全てのミリタントを同時に相手にする余裕が無いことを悟った、と軍筋は述べている。スピードワークは8月5日死亡した **Baitullah Mehsud group**— 現在後継者 **Hakeemullah Mehsud** が率いる—の孤立化を、同じ **Mehsud** 族内でライバルであり、主関心がアフガニスタンである **Adullah Mehsud group** と **Turkistan Bhattani** と同盟することで、試みてきた。

この大いなる戦果を挙げている作戦は米国をして、より温和な同調者から過激派分離のパキスタン軍戦略はそれほど悪くはないな、と思わせてきている。「我々の重点は、パキスタンへの直接の脅威にあると米国を納得させた。この方針が世論の支持を獲得し且つ地域の支援を受ける唯一の途である。我々は一步一步ことに当たる」と当局は説明している。

パキスタンは米国に対しても明らかに、この作戦はパキスタンの作戦では無いと国民に感じさせるような干渉は勿論、直接支援のステートメント発表も控えるように、要請してきている。

戦術面では、軍は **Mehsud** 地域を三方から挟撃し、アフガニスタン国境沿いの帯状地域を制圧した。今回は主として空爆でターゲットの抵抗力沈黙化を図ったが、空爆は多くの一般市民の大移動を必要とし、新たに人道的な苦難を齎している。国境地域、**Dera Ismail Khan** に設置されたキャンプでは着るものだけを背にした貧乏な流民が絶えず流れこんでいるのが見られる。**Malakand** 地区から無数の住居喪失者が—推定約20万人—発生しているが、作戦開始前の

脱出路封鎖と移動長距離が、空爆から避難するため徒歩で岩山越えを余儀なくされた人々の恐怖劇を創り出している。

然しながら、これまで、作戦についての「国家的世論」は人道面ではなく大いに軍に適用されてきている。この国家的世論とは10月16日に国会代表が主導して軍指揮官と軍情報部(**ISI**)部長との会合で作戦実行決定した事を意味する。内部情報によると、**ISI** 部長 **Shuja Pasha** 将軍は参会者に対し「テロリストのターゲット・リストにどれほど多くの人が挙げられているか皆さんは想像できないでしょう……。リストには重要人物と政治家のみならず、違った職業の一般市民も含まれている」と告げた。この会合は、10月11日軍本部での20時間に亘るミリタントとの攻防を含む、**Islamabad**, **Peshawar**, **Rawalpindi**, **Kohat**, **Lahore** での連続テロ攻撃の1週間後に、開催された。**Waziristan** での作戦は明らかに長期戦になっているが、**GHQ** 攻撃は軍にとって藁をも掴むものであろうと見る向きも多い。

Waziristan 進軍時、ミリタントの目的はパキスタンを不安定化以上のものではないと考えていたし、現地で発見したことに対応出来る程ものではなかった。軍が占拠したオリーブ園に囲まれた土小屋の寒村 **Sherawangi** で、9/11 世界貿易センター攻撃犯であり **Hamburg** 細胞の1人として有名な **Mohammad Atta** の旅券のみならず、衛星とインターネット利用

の完璧な通信設備室を発見した。当該地域では TTP よりも Al-Qaeda が活動しているようだとすることが益々明らかになってきた。パキスタン当局は、ペシャワール・バザール、イスラマバッドの World Food Programme(WFP)事務所、各地の学校、など一般市民への攻撃は外国人テロリスト関与事件であると見ている。

パキスタンは偶々、インド製武器と薬品を Waziristan 南部の地点で発見してきており、パキスタン内相は「Balochistan に於いてだけでなく、インドがパキスタン国内でのテロ活動にかんよしている確たる証拠がある」とのべているが、パキスタンに対するインド・レトリックへの単なるしっぺ返しか、もっと本質的な意味を持つのか、不明である。

軍の掃討戦遂行中も、パキスタン政局安定、特に Zardari 大統領と軍部との亀裂、に関心が集まっている。国内上層階級はザルダリと彼の仲間の多くに対し、過去に論じられた事柄—妥協済と読んでるが—ゆえに、不信感を抱いてきたが、今後の 5 年間に民間プロジェクトだけで 75 億ドル援助を約した米国 Kerry-Lugar 法案を巡って新しい亀裂が最近入った。疲弊したパキスタン経済は外貨流入で辛うじて生きているが、同法案が示すパキスタンの主権面で屈辱的な条件について反対する世論に軍が同調した。

同法案のメリットが何であれ、軍の意向がどうであれ、事態を悪化させたのは Zardari のパキスタン人民党政府が軍の保留意向を無視して米国援助を保留なしで歓迎したことにある。法案反対の結果にメディアが同調し、誰かが主権侵害に妥協していると Zardar 孤立化を狙う野党が加わった。国家和解法(NRO)を巡る立往生—官僚汚職を誤魔化す悪法と広く受取られている—Zardari の悪いイメージに結び付いた。

多くの政治学者は Zardari 大統領は徐々に孤立化され、地位を降りるか名目だけの大統領に留まるかになろう、と見ている。自己の弱点を感じ取っている Zardari は、Musharraf 前大統領が大統領府に集中した権力を譲るといふ昔の約束を政敵 Nawaz Sharif に再度提案して取繕いを試みている。NRO 流産で、政敵達は最近復活した独立法廷を利用して Zardari を葬り去ろうとしているので、取繕いでは不十分であろう。

Sharif は、一方では彼が不信感を抱いている上層階級達を勝たせるようにする事と、他方では彼の政党へ全権力掌握、の両面作戦の策略を読んでいる。

然し、全事態が PPP 政府に厳しい訳ではない。

第一に、軍は現時点で民主主義がふらつくのを望んでおらず、国際的にも軍政施行の条件は存在しない。又、Ashfaq Parvez Kayani 将軍は軍が築いた名声が傷つくのを望まない。第二に、政治意志が対ミリタント—その多くは、アフガニスタンでの対ソ連、カシミール問題で対印用に軍に訓練された—一方針で妨害になっていると軍は従来主張していたが、今回のミリタント作戦で、軍と文民政府の間では完全な意見一致がある。又、死傷者増の場

合、或は、反選挙民活動を政友が反対した場合、政治家は世論に立向かう意志がしばしば無いと軍は主張してきたが、ザルダリ大統領は「ミリタントの完全殲滅まで、中断は無い」と人民党仲間に最近述べている。

軍は主要作戦はあとひと月半で終わるだろうと述べている。この見方は、当該地区は12月になると厳しい寒さで、地形と気候を利用する敵に対する軍事作戦は益々難しくなるからである。軍は多くの戦果を挙げてきたし、予想を大きく下回る抵抗だったが、占領した町々と戦略的地点を長期に維持するには問題が残っているし、当該地区からミリタント一掃は軍事作戦だけで十分だ、とは誰も思っていない。軍事作戦の効果は部族民へのミリタント・ネットワークを完全に崩し、政治的プロセスが機能するような場を創ることであるが、長年の軍政とご都合主義に根ざした流儀が変わるにはとほうも無い時間がかかるだろう。

然し、今回の軍事作戦が成功すること、とミリタント汚染地域社会の再建は重要な問題であり、この達成にはパキスタン政界と軍エリートが権力闘争を中止する意志を必要とする。パキスタンにとっても、世界にとっても、混乱に因る失敗は許されない。

India Today, 11月16日号

By Hasan Zaidi in Karachi